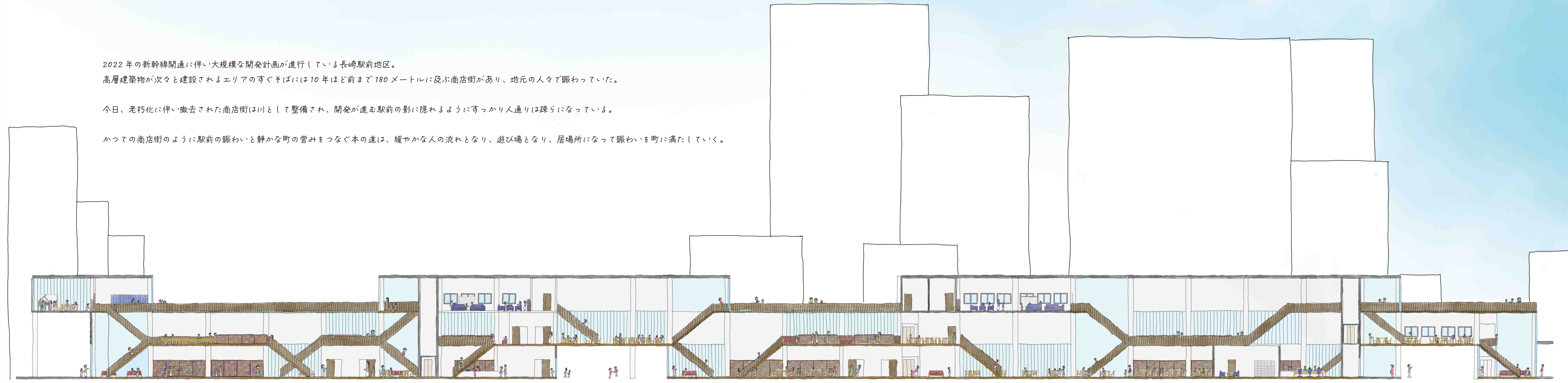
遊本道

2022 年の新幹線開通に伴い大規模な開発計画が進行している長崎駅前地区。
高層建築物が次々と建設されるエリアのすぐそばには 10 年ほど前まで 180 メートルに及ぶ商店街があり、地元の人々で賑わっていた。

今日、老朽化に伴い撤去された商店街は川として整備され、開発が進む駅前の影に隠れるようにすっかり人通りは疎らになっている。

かつての商店街のように駅前の賑わいと静かな町の営みをつなぐ本の道は、緩やかな人の流れとなり、遊び場となり、居場所になって賑わいを町に満たしていく。

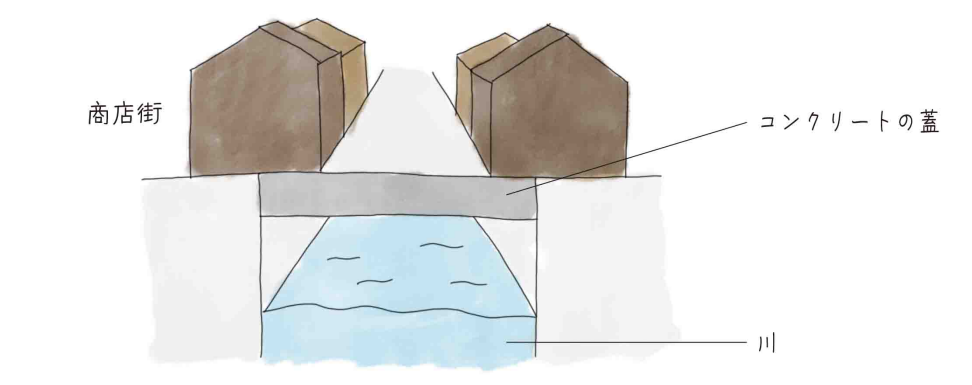


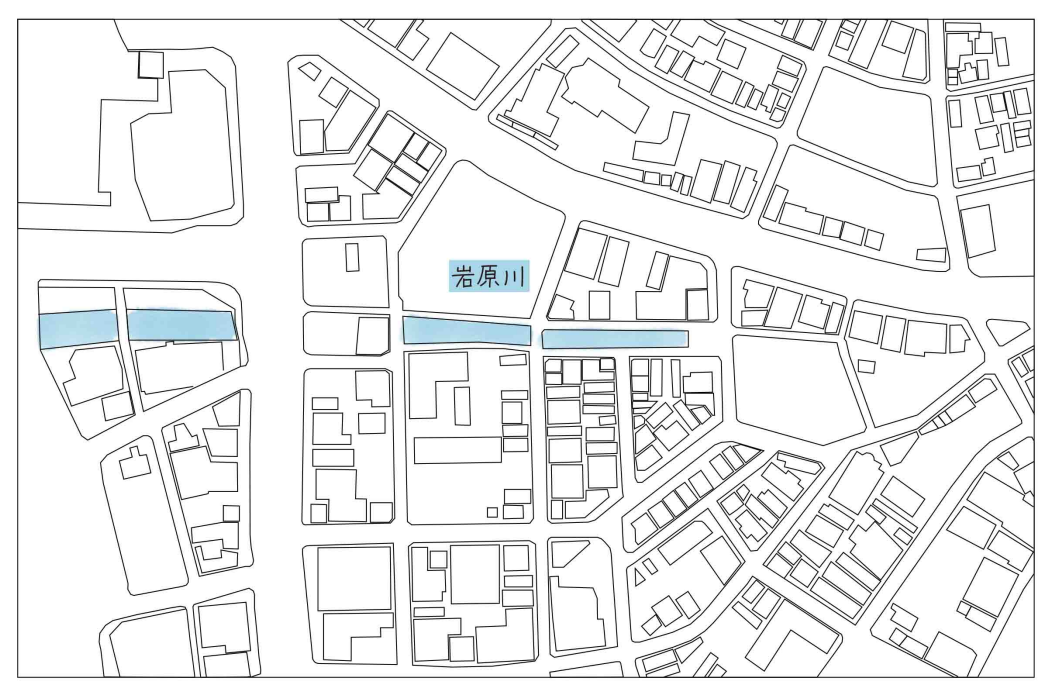
敷地情報

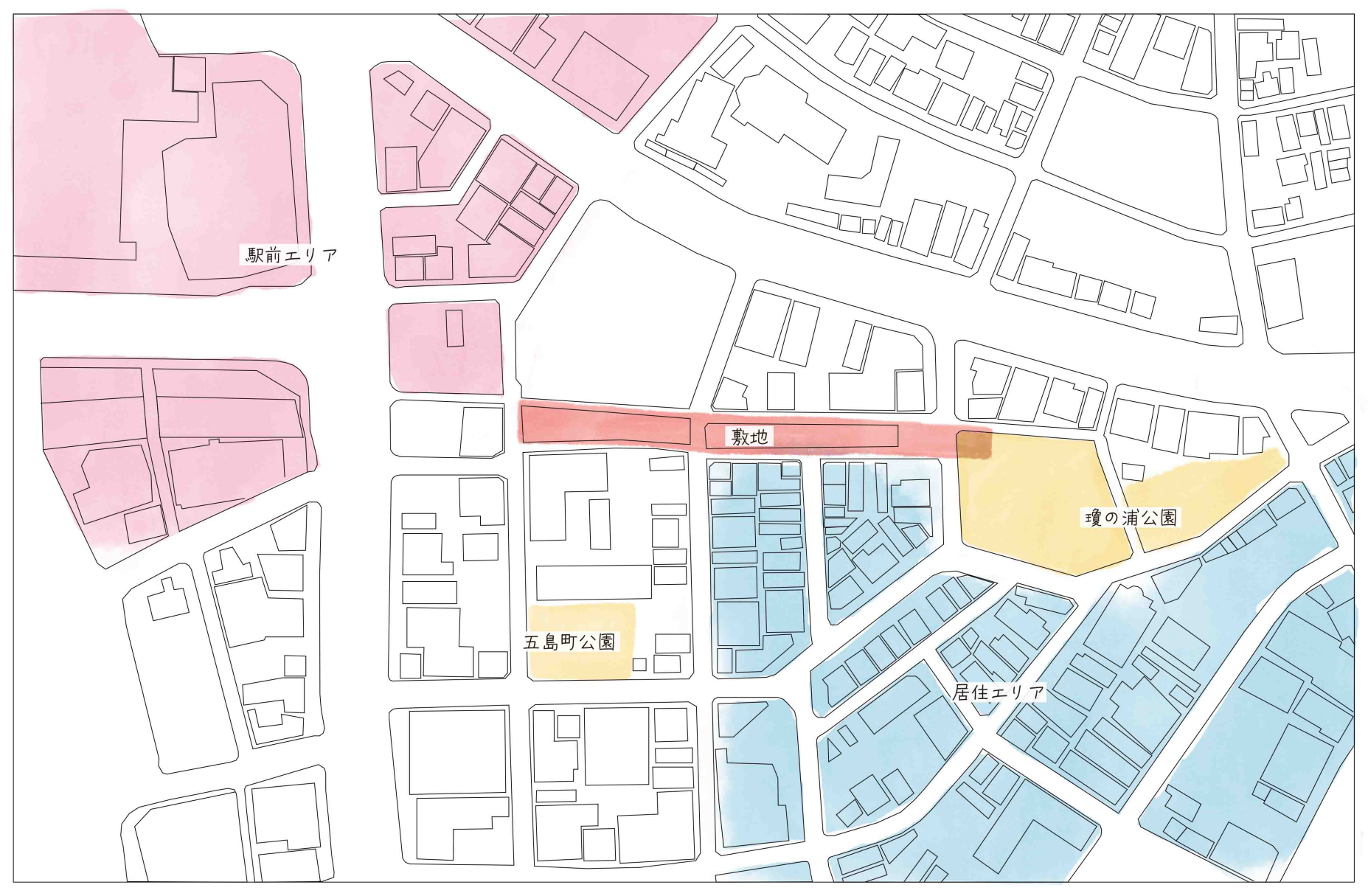
1954 年、戦後混乱期。長崎駅前一体にできた闇市や違法建築物が復興の妨げとなっていた。地域と行政の協力により岩原川の上にコンクリートのふたをすることで代替地が確保され、そこに建設されたのが大黒・恵比寿商店街である。当時地元の人々で賑わっていたこの商店街は、コンクリートの老朽化による崩落の危険があるとして、開設から約50 年後、2012 年 3 月に撤去された。跡地は川として整備されたが、開発が進む駅前から少し奥まった立地も相まって閑散としているのが現状である。

駅前と居住エリアをつなぐことで地域の賑わいを創出しつつ、駅前へ流れ出してく。さらに駅前からの賑わいが町へ流れ込んでくる。

また、敷地周辺には地元の子供らにとっての遊び場となっている公園が 2 つあり、晴れた日には走り回る子供らで賑わっている。これはデジタル技術の発展とともに様々な形の娯楽が普及する今日では減少している景色でありとても貴重である。このような遊び場を残していくことは子供らの健康のためだけでなく、静かな住宅街に賑わいをもたらす要となる。

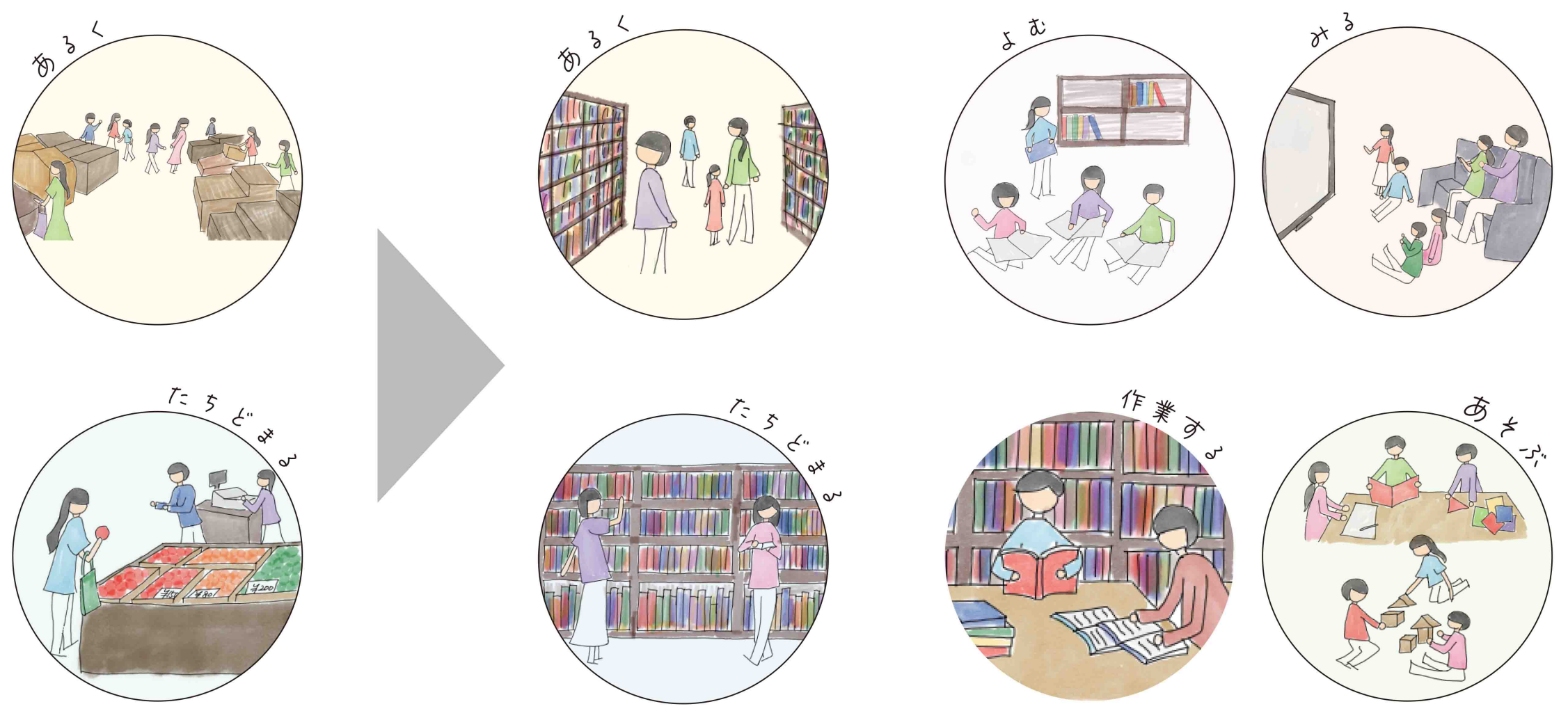






ダイアグラム

一本の道の両側に店舗が配置されているという特性から商店街は動線として利用し歩く人、気になったモノが目に入ってその途中で足を止める人がいる。
このように外部から人が流入し一時的に立ち止まることを繰り返して人々が集まり、賑わいが創出される。
また、歩くという行為のハードルは低くすでにある賑わいの中に気軽に新たに人々が流入することができ、賑わいが拡大していく。
同様に「本の道」では本棚の間を歩き、本がトリガーとなって足を止めるという機能を再現する。
これに加えて本を手に取ってじっくり読む、調べものや宿題などの作業をする、みんなで DVD やホームビデオを見る、室内遊びをする、といった滞在のための要素を取り入れる。外部からの人の流入がより多く長く滞在することでより活気あふれる空間となる。

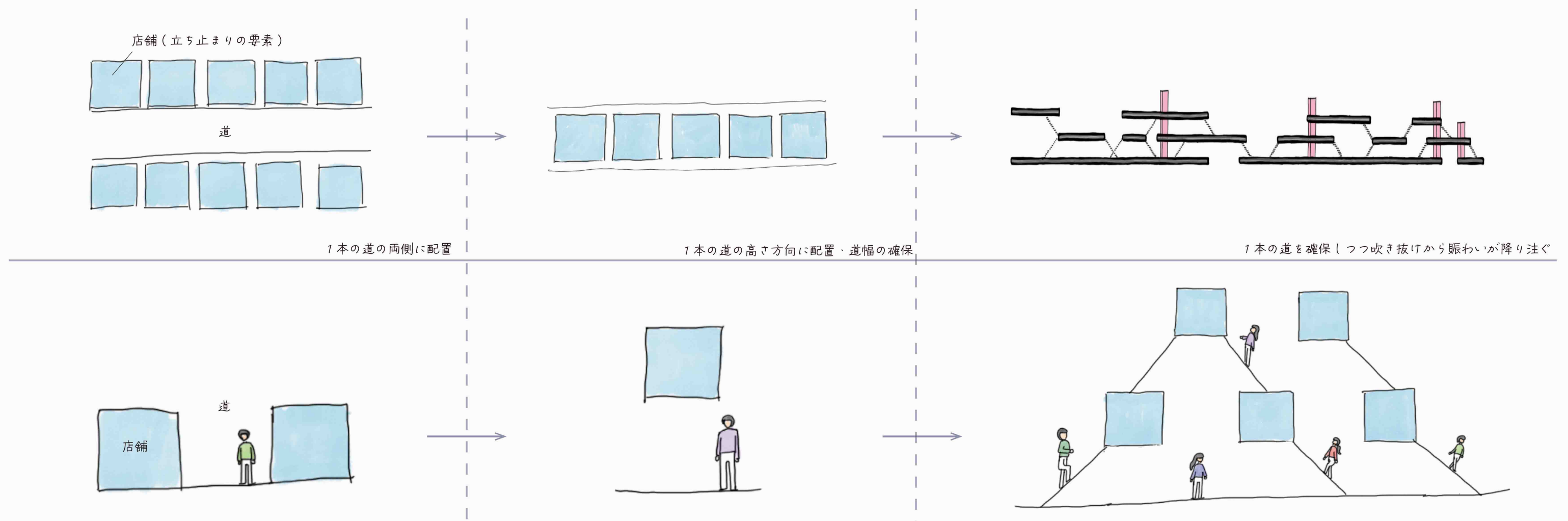


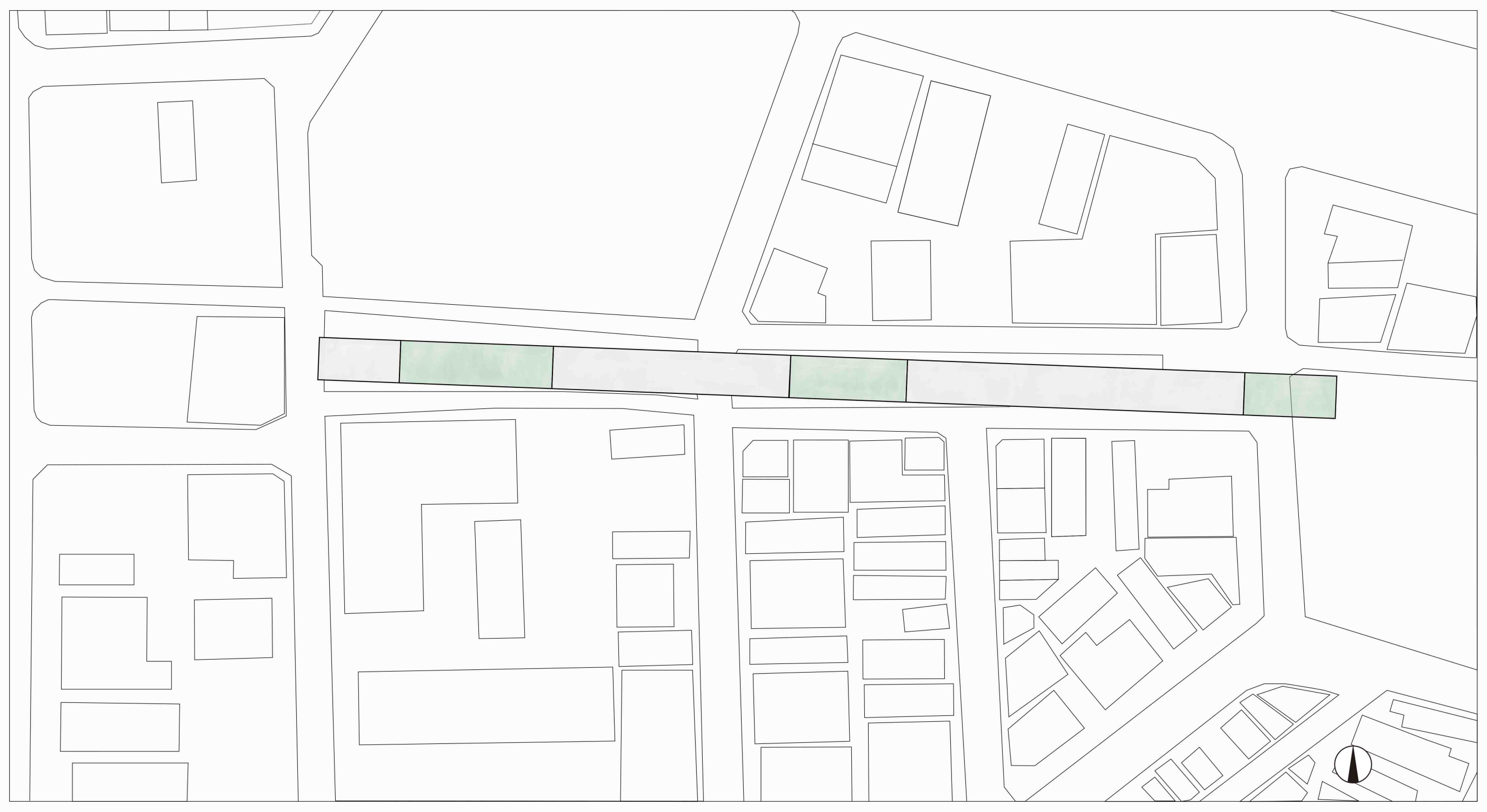
商店街の要素

遊本道の要素

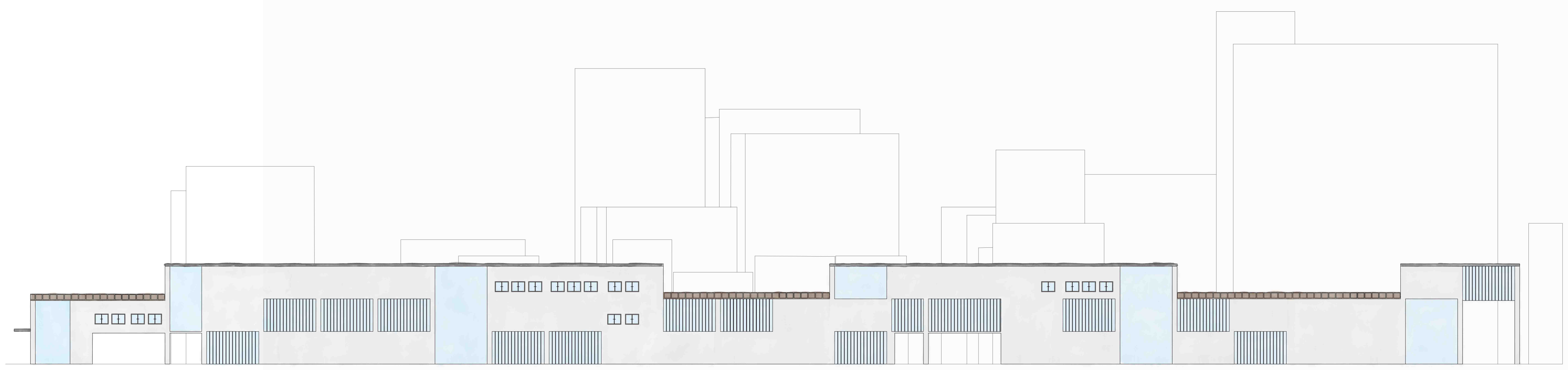
造形

商店街は一本の道の両側に店舗という立ち止まりの要素が配置されている。立ち止まりの要素を道の上に配置することで限られた敷地の中で最大限の道幅を確保し、より多くの人流をとりこみ、賑わいの創出を実現する。
広く確保された道は、興味本位で気軽に足を踏み入れやすく、賑わいの中に新たに加わるハードルをさげ、賑わいを拡大させていく。1階の道を歩く人々には吹き抜けを通して上階の立ち止まり、滞在による賑わいが降り注ぐ。
また、3 階には滞在のための空間を確保し、地元の人々にとっての居場所と成り得る。

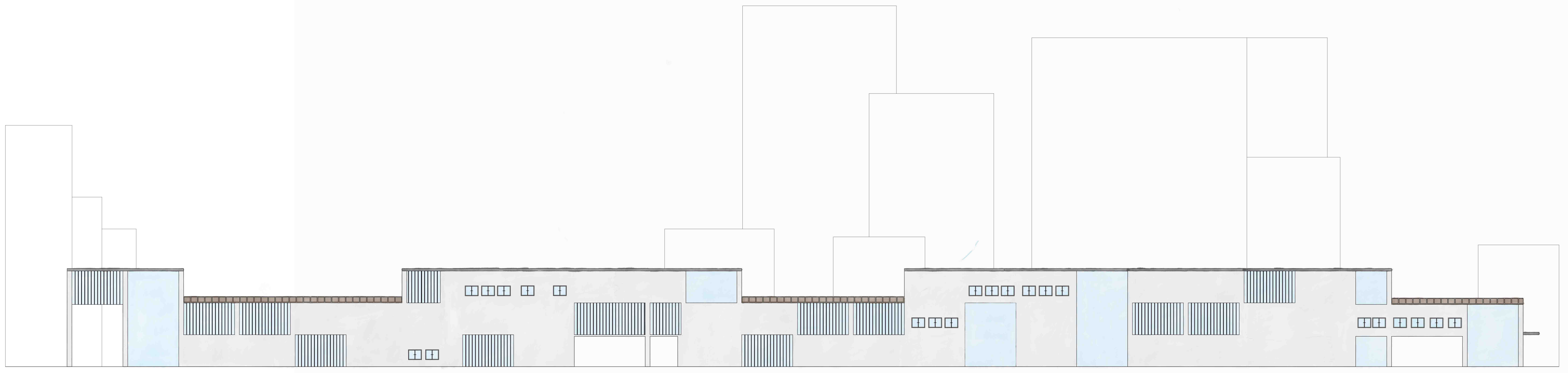

店舗（立ち止まりの要素）
道
1 本の道の両側に配置
1 本の道の高さ方向に配置・道幅の確保
1 本の道を確保しつつ吹き抜けから賑わいが降り注ぐ
道
店舗



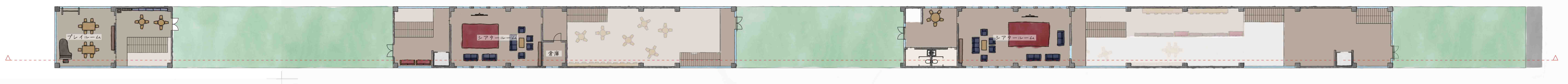
配置図 1/500



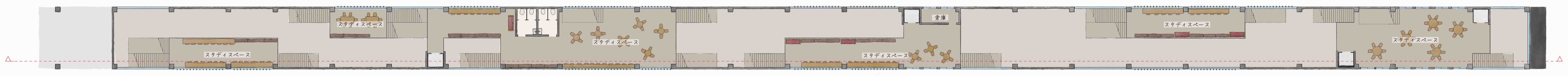
北立面図 1/200



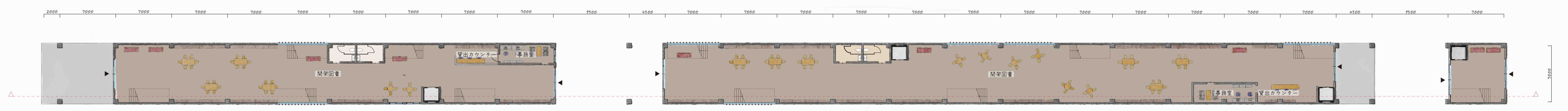
南立面図



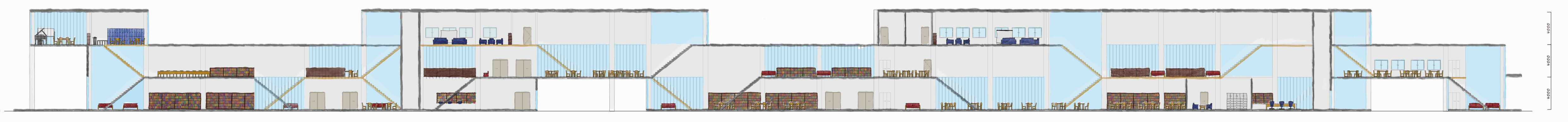
3 階平面図



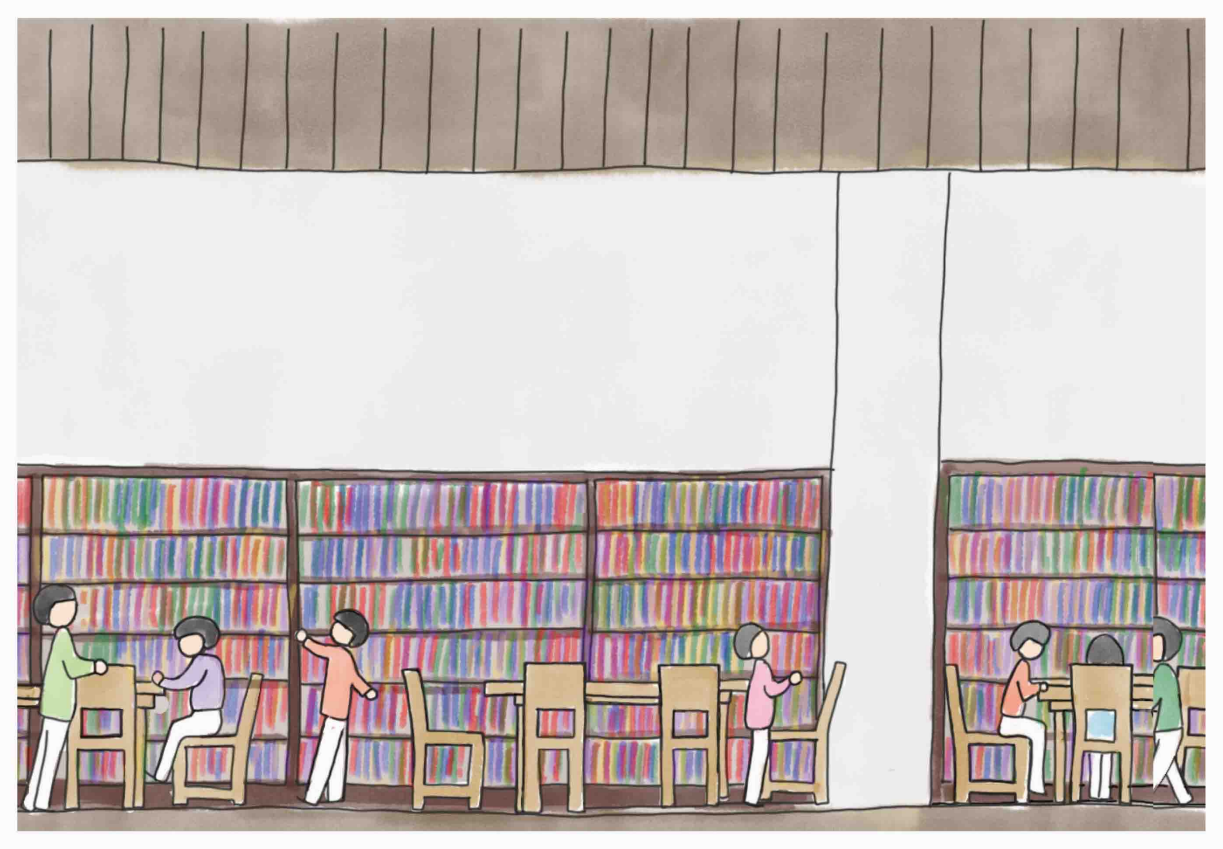
2 階平面図



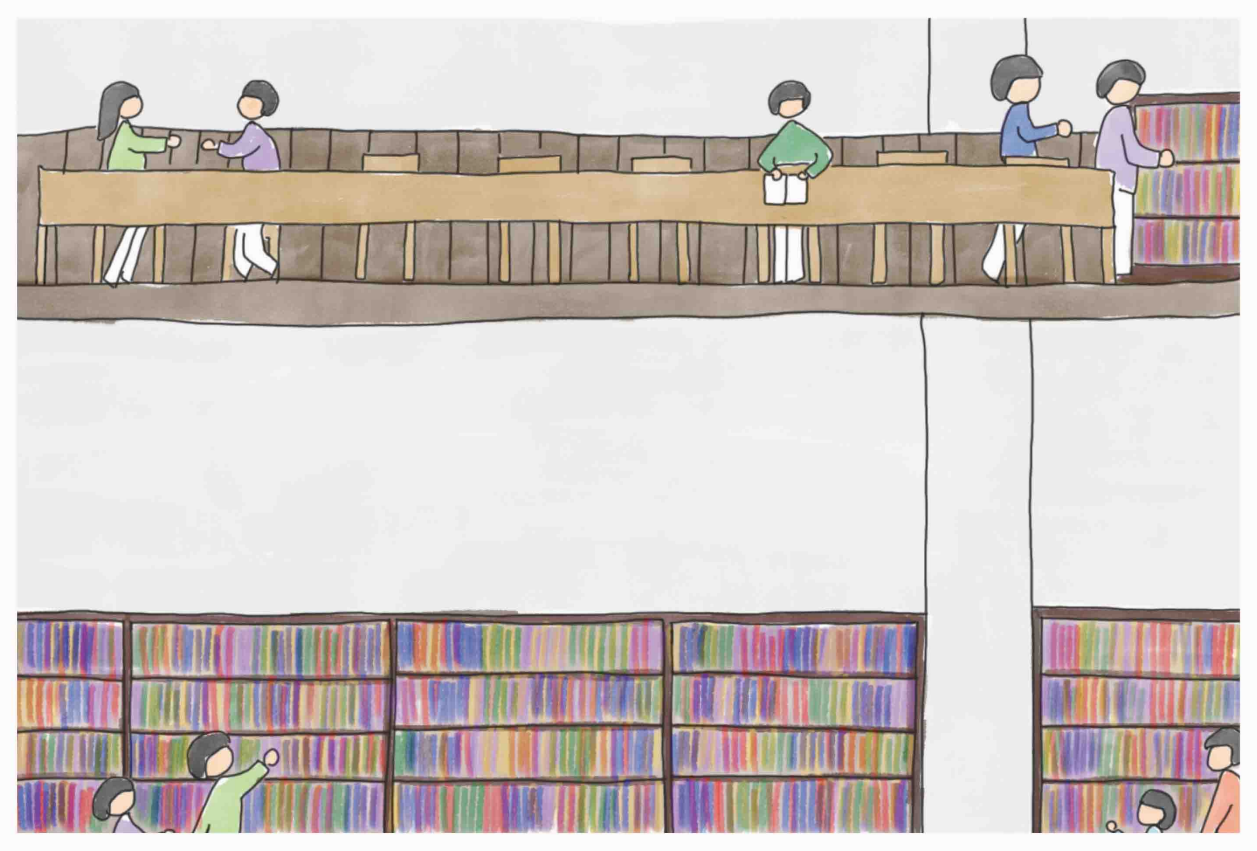
1 階平面図 1/200



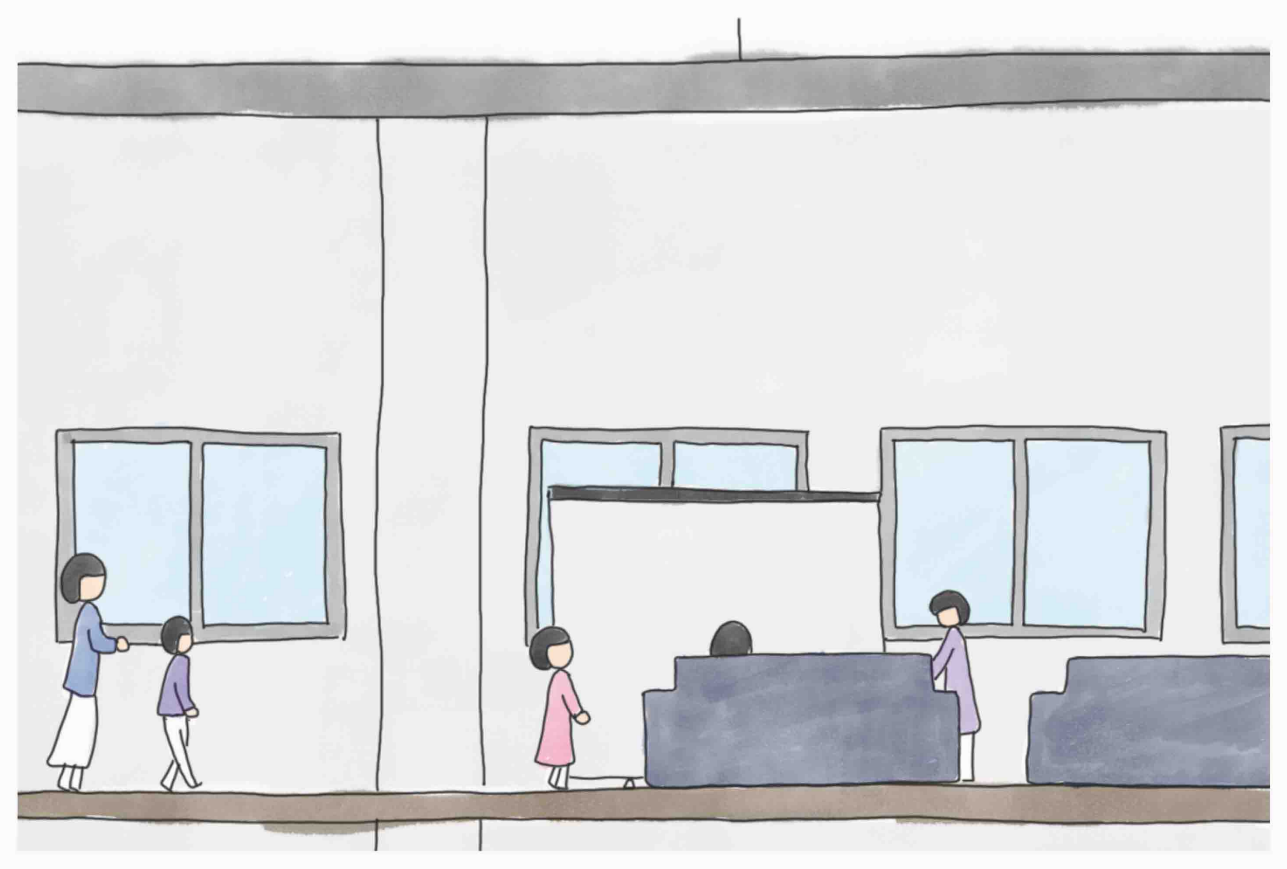
断面図 1/200



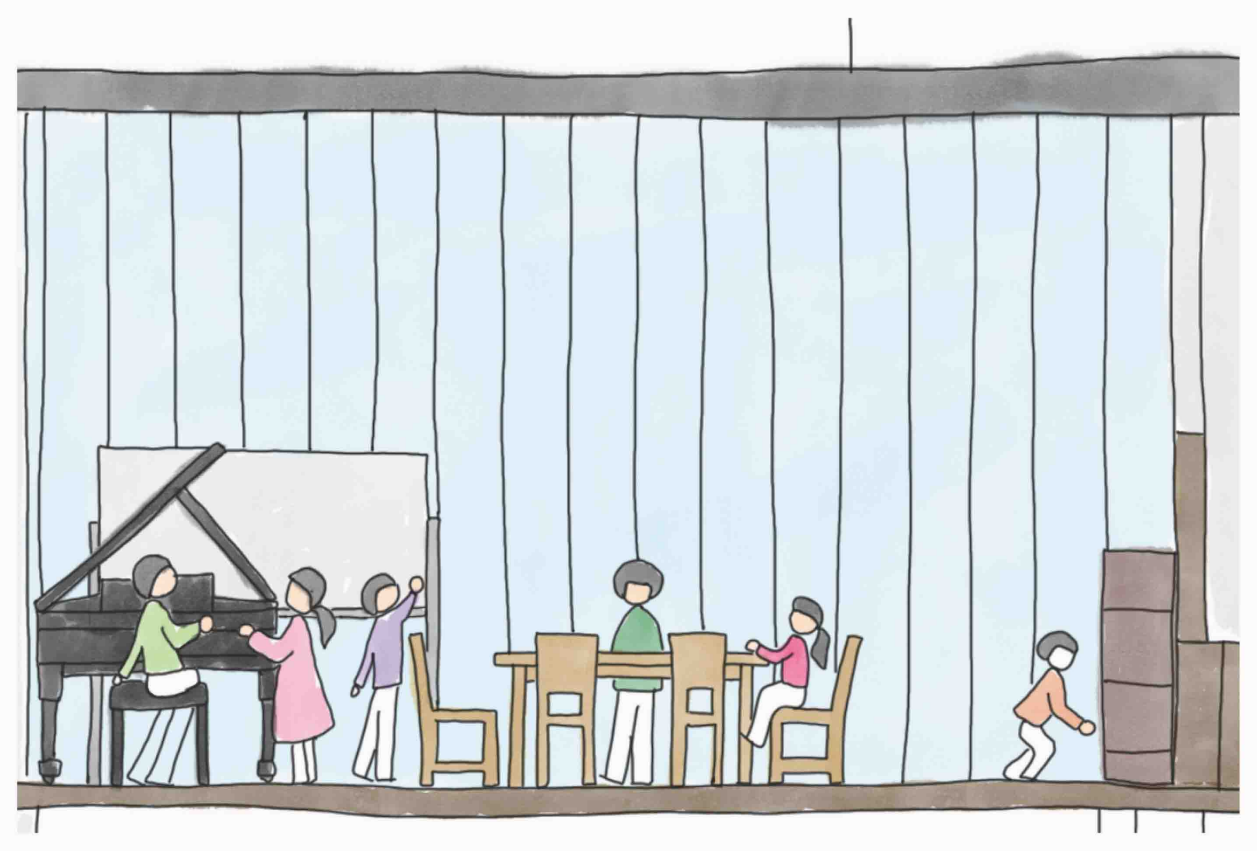
開架図書
歩く人、立ち止まる人、本を読んで滞在する人が交わる。外からの人と街の人が交わる。歩くから立ち止まるへのトリガーである本棚が並ぶ 1 本道には上階からのにぎわいがふりそそぐ。



スタディスペース
勉強や作業等をする人の滞在空間。気になった本を手に取って少し読む等立ち止まりから滞在へ発展する。



シアタールーム
大人数で映像を楽しむ滞在空間。クラス会等でビデオを放映するなら大人数による大きな賑わいが生まれ、DVD の上映会なら動線として利用する人が少し立ちよる等の歩くから滞在へ発展する。



プレイルーム
大人数で遊ぶ、飲食をするなど自由な賑わいが生まれる。雨の日の遊び場。